

関係人口とは

関係人口とは、「観光以上、移住未満の、特定の地域と継続的かつ多様なかたちで関わる第三の人口」を意味します。観光でその土地を訪れる交流人口でもなく、住民票などを持ち暮らす定住人口でもない新しい人口動態として注目を集めています。2020年9月、国土交通省が国内に居住する約15万人に向けて行ったアンケート調査の結果では、少なくとも全国に1,800万人を超える関係人口のみなさんがいることがわかりました。潜在的にはもっと多いと感じています。

ここでは、関係人口の始まりから各地で起きている事例をもとに、関係人口がどう生まれ、かたちづくられていくのかと、関係人口による影響と地域に起こる変化について記していきます。

関係人口のルーツは中越地震

関係人口が各地に現れ、広がったターニングポイントはいくつかあります。特に大きかったのは2011年に起きた東日本大震災と、2008年のリーマン・ブラザーズ・ホールディングスの経営破綻が発端となったリーマン・ショックでしょう。このふたつの出来事をきっかけに、真の豊かさや幸せを問い、追い求める若者たちが中山間地域を訪れるようになりました。

それよりも以前に関係人口の萌芽となったのが、2004年に起きた新潟県中越地震です。国際NGOの日本支部などが働きかけ、国際社会や社会貢献に興味のある若者たちがボランティアとして長岡市や山古志村に足を運び、ローカルの価値観と出合いました。都会では得にくい温かいコミュニケーションや四季折々の自然、人懐こい地域の人々の笑顔。グローバル志向からローカルへと足を踏み出す世代が誕生していったのです。

この20年弱の間に、若者が被災地をはじめ



『ソトコト』編集長
指出 一正

とした地域に出かけていくようになった結果、旅でもない、観光でもない行動を説明する言葉にも変化が生じました。例えば、「陸前高田に通っています」という数量の表現から「陸前高田に関わっています」という深度の吐露に、人々の経験や交流、そして社会の空気が混ざり合い、「その土地に関わる」という動的な表現が交わされるようになりました。これが関係人口という言葉のはじまりです。

関係人口の講座からわかったこと

ぼくはいま、各地の行政よりご依頼をいただいて、関係人口の講座の講師・監修や設計などを行っています。2012年よりメイン講師を務めている島根県の「しまコトアカデミー」は今年で10年目を迎えました。「移住しなくても、地域を学びたい！ 関わりたい！」をテーマとし、「島根を思う仲間を首都圏や大阪、広島、そして島根県内につくる」というコンセプトのもとに、これまで200名以上が受講し、数百名規模の島根県の関係人口のコミュニティに育っています。その中からは島根県や他地域での起業や移住につながる動きも顕著に生まれています。

「しまコトアカデミー」をはじめ、関係人口の講座の現場からわかったのは、地域に関わることを「おもしろい、かっこいい、おしゃ



しまコトアカデミーホームページ ©しまコトアカデミー

れ」だと感じる若者たちの存在でした。例えば、2019年に高知県津野町で開催した「地域の編集学校 四万十川源流点校」では、「地域を編集する」という技術を津野町で学ぶために、大学生を中心とした20名ほどの若者が真冬の津野町に現れました。津野町を訪れたことのなかった若者たちが、町の人たちと風景、産業に出会い、自分ごととして津野町のローカルプロジェクトのよい案を考えてくれました。受講生にこの講座を受けようと思った理由を尋ねると、「地域を編集するというのがおもしろそうだった」「関わる地域を探していた」などと語ってくれました。

いずれもどちらかといえば観光でやって来るタイプの人たちではなく、「地域の人と何かをやってみたい」という気持ちから講座を受講してくれた若者たちです。この当時の統計データでは、高知県の年間の観光客の総数のうち、津野町にはそのわずか0.5パーセントが訪れるのみでした。まちによって、観光の得手不得手は当然あります。だからこそ、観光の振興とはまた別の方法も踏まえて、人と人との対流と接点をつくる。津野町の例のように、関係人口の施策にはその可能性が含まれています。

2018年に始まった和歌山県田辺市の講座「たなコトアカデミー」は、受講生が自発的に東京・青山の国連大学前で開催されている「青山ファーマーズマーケット」で、柑橘や梅、椎茸、卵、米といった田辺市の農産物を販売するブースを出店したり、田辺市の人物を取材し、記事にする特設ホームページを作成したりするなど、積極的な活動が続いています。この活動をサポートしてくれているのが、田辺市の「たなべ未来創造塾」のメンバーを中



たなコトアカデミー ©sotokoto online

心としたみなさんです。「たなべ未来創造塾」は、地域課題の解決や地域資源の活用をビジネスと共に考える、人材育成とビジネスモデルの創出を目指した取り組みで、田辺市の若手の生産者や経営者が参画をしています。「自分たちのまちをおもしろくしたい」と日夜考えている魅力的な大人たちが田辺市に大勢いることが、受講生に親しみを感じさせ、「会いたくなる」「出かけたくなる」という、関係人口を生み出す原動力になっています。それはまさに、人を迎え入れ、仲間として誘う「関係案内人」の宝庫と言ってよいでしょう。

奈良県下北山村ははくが30年来、ローカルの楽しさを教えてもらっている地域です。人口約800人のこの村で、首都圏の若者と村の人々をつなぐ講座「奈良・下北山 むらコトアカデミー」が2016年から19年までの4年間、開講されました。下北山村のことを学び、村の持つ循環型の価値観を体験した受講生の中からは、自発的にワーケーションを行う人や、デザインの分野で下北山村の地域づくりに関わる人が現れました。

村内の旧保育所がリノベーションされて、コワーキングスペース「BIYORI」が誕生すると、ここをサテライトオフィスとして使用する都内のベンチャー企業や奈良県のローカルメディアの編集部の若者が滞在するようになりました。「奈良・下北山 むらコトアカデミー」1期生の森田沙耶さんのアイデアからは、「ムラカラ」という、うつ病や双極性障害の人が疾病の回復を目指し、生き方や働き方を見つめ直して再出発するための宿泊型の転地療養サービスが新規事業として村内で立ち上がりました。森田さんは現在、下北山村で同サービスの施設長を務めています。同3期生の松村萌音さんは、講座による下北山村との出会いを通じて学生団体「まとい」を立ち上げ、下北山村と都市部の学生をつなげる活動を続けています。2020年には村内の空き家を学生と村の人たちとがDIYで改修し、その活動の拠点となる場所をつくりました。

この「奈良・下北山 むらコトアカデミー」と呼応するかのよう、下北山村では数年のうちにいろいろな変化が起きています。地元の方がゲストハウスを複数オープンさせ、若

者の行き来が増え、定期的に開かれる野菜の朝市が人気となり、地域おこし協力隊による自伐型などの林業の取り組みも進み、村の製材所が産業をつくる場として復活しました。オフグリッドや循環型の暮らしを目指すご家族によるカフェも登場しています。「村に若者が歩くようになって、ぱっと明るくなった」と村のみなさんにも好評です。

関係人口は、けっして関係人口となる側のみが学び、成長をしたり、経験を重ねたりするものではありません。その土地を訪れる新しい人との関係性から地域の人たちにも大きな影響や気づき、進展が助長されます。まるで楽しいキャッチボールのようです。

奈良県は関係人口の施策に積極的に取り組んでおり、南部東部の奥大和地域ではアートや映像、コミュニティデザインを取り入れた「奥大和で会いましょう。」「MIND TRAIL奥大和」などのプロジェクトが多数進行し、成果を上げています。天川村をフィールドとした「奥大和アカデミー」からは、名古屋市在住の若者たちによる「お出かけスナックミルクィー」という場づくりが起きました。かわいいネーミングも若者たちによるものです。天川村には天の川という美しい川が流れていますが、英語で天の川は「ミルクィーウェイ」。ここから命名されました。



お出かけスナックミルクィー ©sotokoto online

天川村の洞川地区で廃業した旅館をリノベーションした「シェアオフィス西友」を借りて行われたこのスナックイベントには、一晩で80名以上の人たちが参加し、名古屋の若者と天川村の人々、そして洞川温泉に泊まりに来ていた観光客が交流し、お互いを知るよい機会となりました。参加した若い観光客の方からは「天川村に、こんなに素敵なみなさ

んが暮らしていることを知れてうれしかった。また来ます」という感想をいただきました。普段の観光だけでは素通りしてしまっただけで出会えない地域の人たちとの語らいの時間は、自己の成長や自信にもつながる、旅のその先にある体験です。この出会いをつくったのが、関係人口の若者たち。これも立派な地域づくりだと考えています。

関係人口とは「弱さの交換」

佐賀県佐賀市富士町の^{ちやのき}苜木地区は、30人ほどの住民の方々が暮らす中山間地域です。この土地に現れた関係人口が、マウンテンバイク乗りのライダーのみなさんでした。

マウンテンバイクの愛好家には悩みがありました。それは、森の中を自由に走れるコースを探しても、受け入れてくれる地域や所有者が少ないことです。山の中の道は登山者など、静かに散策を楽しむ方が主流で使用する状況が多く、「危ない」「コースが荒れる」といった声のもと、マウンテンバイクでの走行が敬遠される傾向にあるのです。

「福岡マウンテンバイク友の会」代表の増永英一さんはマウンテンバイクの愛好家たちと九州各地で自由に走れるコースを探していましたが、なかなかよい反応を得ることができませんでした。そのような中で数年前、この苜木地区を訪れ、互いに対話と交流を重ねていった結果、山林を利用する許可を得たのです。

苜木地区のみなさんにも大きな悩みがありました。年に数回行われる「区役」と呼ばれる地域内の道路清掃や草刈りです。この「区役」、以前は1日程度で済んだものが、人口減少と高齢化が進む中で、人手が足らずに2、3日かかってしまうようになっていたのです。状況を理解した増永さんたちは、山林を遊び場として利用させてもらう代わりに「区役」を手伝うようになり、大勢のマウンテンバイク愛好家が「区役」に参加し、作業の時間が大幅に短縮されました。

2017年には「ちやのきエンデューロ」というマウンテンバイクの国際大会が苜木地区で開催されるようになりました。実行委員には苜木地区とマウンテンバイク愛好家のみなさんが共に名を連ね、協働しています。この「ち



ちやのきエンデューロ ©sotokoto online

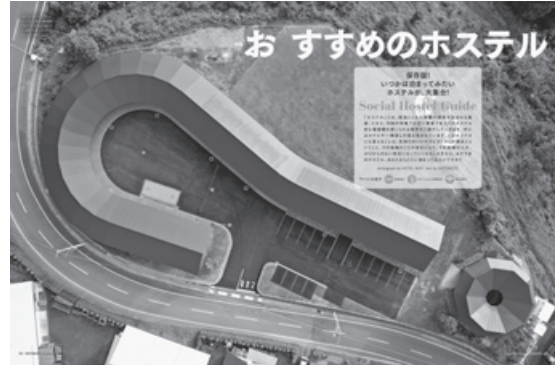
「ちやのきエンデューロ」の開催を機にテレビや新聞などのマスメディアで菅木地区の取り組みが続々と紹介されるようになりました。「ちやのき」という地名をニュースで見たり聞いたりすることで、菅木地区のみなさんは、生まれ育った地元よさを再認識することとなり、シビックプライドが高まってきました。

ぼくはこの「ちやのきエンデューロ」の事例を通して、関係人口とは「弱さの交換」であると学びました。お互いの悩みや弱さを持ち寄って、「どうしたものか」と考え、交換をすることで、状況がプラスに転じ、双方に前向きな効果をもたらす。けっして「強さの交換」ではありません。「強さの交換」には往々にして値踏みが生じてしまうものです。

誰に関わってほしいのか

2020年5月30日、徳島県の上勝町におしゃれでカッコいいホテルが誕生しました。ゼロ・ウェイストアクションホテル「HOTEL WHY」です。ぼくも宿泊しましたが快適このうえなかったです。このホテルの特徴は、「ゴミゼロ」をテーマにしているところでしょう。ホテルの素材の多くが、廃材や廃棄されるはずだった素材をアップサイクルしたもの。宿泊者の出したゴミは細かく分別して、自ら処分する。ホテルの立っている敷地は「上勝町ゼロ・ウェイストセンター WHY」と呼ばれるところ。上空から俯瞰して見ると施設全体が「？」(クエスチョンマーク)のかたちをしているのがクリエイティブです。そもそもは上勝町のゴミの収集所であり、「HOTEL WHY」と共にリニューアルされ、現在もその役割を担っています。

上勝町は2003年に自治体として日本で初めて「ゼロ・ウェイスト宣言」を行った町です。ゴミ収集車は周回せず、住民のみなさん



HOTEL WHY ©sotokoto online

が各自で「上勝町ゼロ・ウェイストセンター WHY」にゴミを持ち込み、資源として45分別を行っています。「HOTEL WHY」を含めた「上勝町ゼロ・ウェイストセンター WHY」の施設の管理を行うのが、神奈川県出身の大塚桃奈さん。大学を卒業後、社会人1年生で上勝町に移住し就職、同施設のCEO (Chief Environmental Officer) の肩書で働いています。サステナビリティに興味があり、サーキュラーエコノミーやエシカルファッションなどを学生時代に学んだ大塚さんと上勝町の出会いは運命的なものだったのかもしれません。

上勝町の第一期の「ゼロ・ウェイスト宣言」は2020年でのゴミゼロを目指していました。その達成率は80パーセント以上となりました。いま、新たな目標に向かっての取り組みが始まっています。大塚さんと「HOTEL WHY」に関わるみなさんに、これからの上勝町のことを聞くとこんな答えが返ってきました。「長崎、広島といえば平和教育。上勝といえば環境教育、そういうイメージが浸透して、環境やサステナビリティに思いを持つ人たちが上勝を訪れ、仲間になってくれるとうれしいです」。

関係人口は幅のある言葉ですが、上勝町のように、一緒にどんな未来を見てくれる人に関わってほしいのか、イメージを共有することも大切です。町の未来をつくる仲間、それも関係人口のできることのひとつでしょう。

関係人口の新傾向

ここ数年、関係人口には新たな傾向が見てとれます。まず、「オンライン関係人口」です。コロナ禍の中で発展している関係人口の一種で、「しまこトアカデミー」は、2020年度か

ら「しまコトDIGITAL」というオンライン講座に切り替わりました。「オンラインで地域との関係性をリアル同様につくれるのか」という懸念は杞憂に終わり、半年の講座の後も受講生と地域間の親しいコミュニケーションは続いており、「しまコト新聞」という紙媒体の発行にまでつながりました。会えないからこそ、会いたい気持ちとその地域への思いが高まる結果となり、効用が生まれています。また、和歌山県的那智勝浦町にあるゲストハウス「WhyKumano Hostel & Cafe Bar」が行った「オンライン宿泊」のサービスは、自宅にいながら宿泊の擬似体験ができ、旅好き、地域好きの仲間との出会いと交流が味わえるということで注目されました。これも「オンライン関係人口」をつくった好例です。島根県松江市の関係人口のプロジェクト「and YOU」は、オンラインで受講した各地の若者と松江市内の地域づくりに取り組む先輩世代のみなさんが出会うよいきっかけとなりました。「オンライン関係人口」は、時間的や世代的、身体的な制限などで、これまで地域との関わりをつくりにくかった層にも広がる可能性があるかと期待しています。

次に「地域内関係人口」です。栃木県宇都宮市の釜川沿いにある「ゴールドコレクションビル」を拠点とするまちづくりのプロジェクト「ビルトザリガニ」には、おしゃれなイベントやまちの未来を考えるワークショップを通じて、埼玉県や宇都宮市近郊の市町から若者たちが関わりに来て来ています。「ビル

トザリガニ」のメンバーには、建築家やクリエイターのみならず、宇都宮市在住や近隣の企業に勤めるエンジニアのみなさんも含まれています。大きな移動への制限が課された時期、地域内を見渡せば、実は遠いどこかだけではなく、ご近所にも同じ思いをもつ仲間がいることに気づきました。まさに「遊びに行く」から「関わりに行く」というライフスタイルの変化といえます。

最後に、「流域関係人口」です。これは日本各地の大きな川のあるエリアで生まれた関係人口です。最上川が流れる山形県の最上地域では、新庄市のフリーペーパー『季刊にゃー』の編集部のメンバーが最上地域の美しい暮らしを発信し、そこに呼応するかのよう、流域の金山町や鮭川村、真室川町などで活躍するみなさんが、それぞれのコミュニティを持ちながら、マルシェの開催などでやわらかな連携をとっています。福岡県の筑後川や秋田県の雄物川、徳島県の吉野川にも、特徴のある素敵な流域関係人口のコミュニティがあります。川はかつてのハイウェイであり、ロジスティックのみならず、情報や社会の気分の伝達手段でした。流域は、歴史や文化、コミュニケーションにも共通することが多く、お互いの関係性に体温のある親近感を持ちやすいのかもしれない。

「関わりしろ」と「関係案内所」

関係人口が広がっていくためには、「関わりしろ」があることが重要です。「関わりしろ」とは、誰もが関わりたくなるような余白があることを指します。完成されて取り付く島もないツルツル、ピカピカさではなく、「自分ならこんなことができそう」という内発性と創造性を誘引するザラザラ感です。閉じられたり、完結したりしていない「半開きの状態」とも表現できます。

福岡県那珂川市の玄関口である博多南駅前ビル、通称「ナカイチ」は1階から4階まで、状況や過程に合わせた「関わりしろ」の仕掛けが満載です。特に2階のカフェとイベントスペースでは、「ローカルプロジェクトに参加するまでの積極性はまだないけれど、そういう雰囲気のところの近くに身を置きたい」と



「ビルトザリガニ」のみなさん ©sotokoto online

いう、高校生や大学生、若い未来のローカルヒーローとヒロインの予備軍が好きなだけ気軽にそこにいられる心地よさを意識的に作り出しています。何の気なしに耳に入ってくるのが愉快的な農業の話だったり、ワクワクする地域づくりや地元の話だったり。やさしいいざないから、バトンは引き継がれていく。「ナカイチ」は、人と人との偶発的な出会いを広げ、地域との関わりを必然的に生み出す「関係案内所」だとぼくは考えています。

新しいキーワードは「あさって」

三重県大台町にはトヨタ自動車が森づくりに取り組む「トヨタ三重宮川山林」があります。この森では、素敵なローカルプロジェクトが進んでいます。プロジェクトの名前は「ワンコの森あそび」。愛犬家とワンちゃんが自然の中でのびのびと一緒に過ごせるドッグフィールドです。その広さは東京ドーム364個分。リーダーの小田明さんは2017年にトヨタ自動車が募集したローカルベンチャーのプログラムに参加しました。東京在住で島根県の石見地方出身の小田さんは、将来は地元に戻り、森林に携わるビジネスを起業したいと考えていました。いろいろなビジネスプランを考えた小田さんですが、メンターたちに「小田さんらしいものを」とアドバイスを受け、悩まれた結果、「自分が好きなのは家族でもあるワンコたちだ」と、森と犬を結びつけるこのプランを発表し、採用されました。



ワンコの森あそび ©WansLaugh

大台町の森の中を家族と共に走り回るワンちゃんたちは、自然と笑顔になっていきます。普段は見られない表情に、飼い主たちも大喜びし、互いに元気さを増します。社会が新し

い家族のありように変化しているいま、この「ワンコの森あそび」はSDGsやウェルビーイングの思想にも通底しています。日本の森から幸せをつくる。大台町の関係人口となった小田さんが、林業の課題に対してのアイデアを提示してくれているように思います。

ぼくはいま、「あさって」という価値観と言葉が気に入っています。「あさって」は、「あした」よりもあやふやで、見間違いと意味的に位置づけされるようですが、この時間軸は、あわいがあって、人を追い込みません。そして、思わぬ方向から何かが現れるゆるいワクワク感を示唆してくれています。小田さんのローカルプロジェクトは、森林の課題に新たなアプローチからも関われる道筋をつくりました。林業の専門家や研究者とはまた異なる、愛犬家や家族というコミュニティが日本の森の現況に気づきを得ていく。何か思わぬことが地域に生まれるかもしれません。

それはまるで、「あさって」の感覚。関係人口はこの「あさって」を体現した層であり、現象です。ぼくは、関係人口と地域のみなさんがつくる「あさっての社会」を楽しみにしています。

著者略歴

指出 一正 (さしで・かずまさ)

『ソトコト』編集長。島根県「しまこトアカデミー」メイン講師、和歌山県田辺市「たなこトアカデミー」メイン講師をはじめ、地域のプロジェクトに多く携わる。内閣官房まち・ひと・しごと創生本部「わくわく地方生活実現会議」委員。国土交通省「ライフスタイルの多様化と関係人口に関する懇談会」委員。総務省「過疎地域自立活性化優良事例表彰委員会」委員。農林水産省「新しい農村政策の在り方検討会」委員。林野庁「森林空間を活用した教育イノベーション検討委員会」委員。内閣官房水循環アドバイザー。経済産業省「2025年大阪・関西万博日本館」クリエイター。著書に『ぼくらは地方で幸せを見つかる』（ポプラ新書）。趣味はフライフィッシング。